

『世説』の編纂と劉宋貴族社会

土屋, 聡
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9598>

出版情報：中国文学論集. 33, pp. 46-60, 2004-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：published
権利関係：



『世説』の編纂と劉宋貴族社会

土屋 聡

一 従来の『世説』編纂実態の究明状況

六朝宋の劉義慶(四〇三-四四四)撰とされる『世説新語』¹⁾(以下、『世説』と称す)は、概ね後漢末から東晋末までの名士や貴族の言動一一三〇条を、德行・言語・政事・文学に始まる三十六門の篇目に分類したものである。その撰者の問題は、魯迅が義慶幕下の複数の文人の手に成るもの²⁾(『中国小説史略』)と論じて以来、様々に考察されてきたが、未だ定論を見ない問題である。本稿の最終目的も『世説』の実質的撰者の究明であるが、そのためには『世説』の編纂意図と受容層の把握が先決問題であると考える。

『世説』の編纂意図について、従来の研究では、東晋までの貴族全盛期を良しとして現体制を批判した書とする「体制批判説」や、政治的に不遇であった劉義慶が文学へ傾倒した結果著された書とする「文学愛好説」³⁾があった。しかし前者は、実質的撰者が別にあるとしても、王族「劉義慶」の名が『世説』の撰者とされている事実の説明がつかない。後者については、『宋書』や『南史』の劉義慶の経歴⁴⁾を見る限り、彼が政治的に不遇であったとは考えがたく、また『世説』が桓玄・謝靈運といった劉氏一族にとって敵対者や反逆者であった人物を取り上げていることは、単なる文学愛好のみでは割り切れない切実な編纂事情を物語っているように思われる。そこで本稿では、撰者とされる劉義慶を『世説』編纂に突き動かした原動力は何であったのかという問題、すなわち『世説』編纂の意図と『世説』撰者が想定した受容層とを明らかにしたい。

二 『世説』に見える機知的言動とその場面

『世説』の性格、特にどのような故事を重視しているかを探るには、先述の桓玄・謝靈運の故事のうち肯定的評価が下されているものを見るのが有効であろう。なぜなら、『世説』が彼らの故事を敢えて収録するからには、その前科に目を瞑ってでも収録するべき価値があるとの評価が下されたと考えられるからである。

桓玄の登場回数は三十四回。晋朝に引引く反逆者として敵役を免れないが、その中で肯定的評価がなされているものに次のような典故を用いた例がある⁽⁶⁾（傍点引用者、以下、同）。

桓玄當篡位、語下鞠云、「昔羊子道恆禁吾此意。今腹心喪羊孚、爪牙失索元。而忽忽作此詆突、詎允天心。」

(傷逝19)

桓玄が東晋王朝を篡奪する際に、下鞠にかつての部下のことを語った言葉である。「腹心」という語は『詩経』周南「兔置」の「起起武夫、公侯腹心（起起たる武夫、公侯の腹心）」を出典として、旧部下の羊孚を「兔置」の立派な「武夫」に喩え、正に「公侯」すなわち桓玄の「腹心」であったと言うものであり、また「爪牙」は同じく『詩経』小雅「祈父」の「祈父、予王之爪牙（祈父、予は王の爪牙）」を出典として、索元を王の近衛兵である「爪牙」に喩え、信頼するに足る股肱の部下であったというものである。この『詩経』を典拠とする桓玄の述懐を、『世説』は格調高く死者を悼み悲しむ言葉として、傷逝篇に収録しているのである。謝靈運の故事は次の通り。

謝靈運好戴曲柄笠。孔隱士謂曰「卿欲希心高遠、何不能遺曲蓋之貌」。謝答曰「將不畏影者未能忘懷」。

(言語108)

「曲柄笠」を好んで被る謝靈運に対し、孔隱士（淳之）は「心に高遠なものを希求しながら、どうして外形を飾ることを忘れられないのか」と非難した。そこで謝靈運は「莊子」漁父篇の、影を恐れて走り続け死んでしまった患者を孔隱士に喩え、「影を畏れる者（外形を気にする孔隱士）は、まだ影（外形）の事が念頭を離れないということではないか」と皮肉を以て言い返した。言語篇は、読む人を唸らせる機知に富んだ言辞を集めたものであって、

この故事もそれに類すると評価されたのである。なお『世説』中、謝靈運は、この一例のみが収録される。

これらの例は当意即妙の機知、就中、典故を踏まえた言語表現という点で共通している。むしろ『世説』に見られる機知には様々な形があるのであつて、典故表現はその中のひとつに過ぎないが、宋朝にとって忌むべき存在の桓玄や謝靈運の言動を収録したということは、それだけ機知的言動の精髓として高い評価を下していると言える。

思つに、こうした発言・会話は、第一に典拠とする古典の習熟が前提条件にあり、学問的素養のない庶民・軍人には不可能であること、第二に前もつて案頭での準備が可能な「文章」と異なり、その場面に即した古典語を用いるため、目端的利いた俊敏さが求められること、第三にその結果として聞き手に対して強烈な印象を与えるものであること、これらのことから、人物の評価が風聞によつて広まる貴族社交界において、「才知溢れる教養人」という名声を獲得するには、まことに相応しい手段であつたと考えられる。

なお、『世説』中に見える典故を用いた発言・会話の故事は一七八例であるが、その内、貴族の社交の場でなされたと考えられる故事は一二五例を数える。そこで『世説』登場回数之最も多い謝安を例にとつて、古典の語句を典拠に織り込んだ発言を取り上げ、それらがどのような場面で用いられているかを具体的に見てみよう。

1 謝太傅絶重褚公、常稱「褚季野雖不言、而四時之氣亦備。」 (德行34)

これは謝安が褚裒を賞讃した人物批評である。『論語』陽貨篇「子曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。天何言哉。」(子曰く、天 何をか言はんや。四時行はれ、百物生ず。天 何をか言はんや)を出典とし、天は何も言わないが、それでも時は運行し万物は生じる、というのに掛けて、褚裒は何も言わないが、態度や行動にその人格が表れている、というものである。……「場面は未詳」。

2 王黃門兄弟三人、俱詣謝公、子猷・子重多說俗事、子敬寒溫而已。既出、坐客問謝公「向三賢孰愈」。謝公曰「小者最勝」。客曰「何以知之」。謝公曰「吉人之辭寡、躁人之辭多、推此知之。」 (品藻74)

王徽之(子猷)・操之(子重)・献之(子敬)兄弟が謝安を訪問したとき、他の二人が頻りに雑談していたのに対して王献之は時候の挨拶をしたのみであった。彼らが帰った後で同席した客の質問に「小者(献之)が優れていると答えた謝安は、『易』繫辭伝下「吉人之辭寡、躁人之辭多(吉人の辞は寡なく、躁人の辞は多し)」を出典とし

て、その人物批評の根拠としている。……「王兄弟や「坐客」が謝家を訪問した場面」。

3 桓公既廢海西、立簡文、侍中謝公見桓公拜。桓驚笑曰「安石、卿何事至爾」。謝曰「未有君拜於前、臣立於後」。

(排調 38)

桓温の手によつて簡文帝が即位した時、謝安は桓温に対して拜礼した。驚く桓温に謝安は「公羊伝」文公十三年「周公拜乎前、魯公拜乎後(周公 前に拜し、魯公 後に拜す)」を典故として、「君(簡文帝)が前で拜礼されるのに、臣下が立つたままというのは未だかつてありません」と答えた。これは臣下の分際をわきまえない桓温の専横に対する痛烈な皮肉である。……「宮廷での場面」。

4 謝遏夏月嘗仰臥、謝公清晨卒來、不暇著衣、跳出屋外、方躡履問訊。公曰「汝可謂前倨而後恭」。

(排調 55)

謝安が朝早くに謝玄(遏)を訪問したとき、急な来訪に驚いた謝玄は、着物を着るひまもなく裸足で飛び出し、履き物を引っかけるのがやつとの有り様で挨拶した。謝安の言葉は、裸で寝ていた謝玄が態度だけ恭しく挨拶したのを揶揄したもので、不遇時代の蘇秦に対して横柄な態度を取っていた家族が、後に合従策が用いられて出世すると急に態度を変えたことに対する蘇秦の言葉「何先倨而後恭(何ぞ先には倨りて後には恭し)」(『戦国策 秦策)を引いている。……「謝安が謝玄宅を訪問した時の場面」。

5 謝太傅謂子姪曰「中郎始是獨有干載」。車騎曰「中郎衿抱未虛、復那得獨有」。

(輕詆 23)

これは謝万(中郎)の人物を批評したものであり、「獨有」は「莊子」在宥篇「出入六合、遊於九州、獨往獨來、是謂獨有(六合に出入し、九州に遊び、独り行き独り来る、是を獨有と謂ふ)」を典故としている。「莊子」では天地四方に自在に出入りし、世界全土に遊ぶ者を「獨有」と言つ、とあり、謝安はこれを典故として、謝万もそのような自由闊達な人物であると評価している。……「場面は未詳」。

これらの場面を分類すると、3 (宮廷) や 2・4 (他家への訪問や来客時) など、人が集まる社交の場になされていることが判る。また 1 や 5 のように、場面未詳の故事の中でも人物批評故事については社交的な場面と考えて良い。なぜなら六朝の人物批評は、後漢の許劭の「汝南月旦」に始まり、やがて「九品中正法」

が始まると、官吏登用の際の参考とするため数多の評語が生まれ、また「劉丹陽・王長史在瓦官寺集。桓護軍亦在坐、共商略西朝及江左人物。云々」（品藻42）のように人物批評を目的とした集まりが催されることもあり、清談とともに貴族の社交の中心として非常な盛行を見たからである。

このような社交の場において、上述の如き典故を踏まえた言動や、その他の機知に富んだ言動は、人々の耳目に強く印象づけられたに違いない。『世説』はそれらを直接取材したものではないが、その性格として貴族社交界を舞台に周囲を睥睨させた人々の言動を収集したものの、中でも典故を踏まえた言辞は、その人物の功罪に関わらずこれを肯定的に評価するという態度が明らかとなった。

ところで、かかる言動を歓迎する風潮が魏晉貴族層にあつたとすれば、六朝貴族社交界が存続する限り、『世説』に見られる機知的言動に喝采をおくる風潮も変化しない筈である。つまり、劉宋貴族社会においても『世説』と同様の機知的言動がなされていたと考えられるのである。次章では宋朝貴族の機知的言動について検証する。

三 宋朝貴族の機知的言動

ここでは、前章と同様に、古典の語句を織り込んだ発言を規準として、宋朝における貴族達の言動を取り上げる。

晉恭思皇后葬、應須百官、湛之取義熙元年除身、以延之兼侍中。邑吏送札、延之醉、投札於地曰「顏延之未能事生、焉能事死」。

（『宋書』顏延之伝）

恭思皇后の葬礼は晋時の礼に則って行われ、百官を参列させるに当たって、顔延之は義熙元年に出仕したことから、侍中として参加することとなった。「邑吏」が任命の文書を届けると、延之は酔いに任せてそれを投げつけ、「私は生を事として満足な人生を送ることもできぬのに、どうして死（恭思皇后の葬礼）に従事できようか」と吐き捨てた。これは『論語』先進篇「季路問事鬼神。子曰、未能事人、焉能事鬼。敢問死。子曰、未知生、焉知死（季路鬼神に事へんことを問ふ。子曰く、未だ人に事ふる能はず、焉くんぞ能く鬼に事へんこと。敢へて死を問ふ。子曰く、未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らんと）」を出典として、葬礼への参加を言下に拒否したものである。

與從弟球俱詣高祖、時謝晦在坐、高祖曰「此君並膏粱盛德、乃能屈志戎旅」。曇首答曰「既從神武之師、自使懦夫有立志」。晦曰「仁者果有勇」。

(『宋書』王曇首傳)

王曇首が從弟の王球と共に劉裕を訪れた時のこと、劉裕が彼らを「富家の貴公子であるにもかかわらず、よく我慢して北伐に従軍してくれた」と賞賛すると、曇首は『孟子』万章下「故聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」(故に伯夷の風を聞く者、頑夫も廉に、懦夫も志を立つる有り)を踏まえて「伯夷」を劉裕に、「懦夫」を自分に喩え、「北伐の偉業に従軍するからには、懦弱な私も猛志を奮い立たせました」と言った。すると同席していた謝晦は『論語』憲問篇「子曰、有德者必有言。有言者不必有德。仁者必有勇。勇者不必有仁」(子曰く、徳有る者は必ず言有り。言有る者は必ずしも徳有らず。仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず)を典故として「仁者(劉裕)の幕下にはやはりこの勇敢な者(王曇首)がいるものです」と言葉を添えた。王曇首の『孟子』の語を用いた追従に対して、謝晦も負けじと『論語』を引いてこれに続けている。これは阿諛追従にも競争意識が発露する例である。

(王景文) 長子絢字長素。年七歲、讀論語至「周監於二代」、外祖何尚之戲之曰「耶耶乎文哉」。絢即答曰「草翁風必偃」。少以敏惠見知。

(『宋書』王絢傳)

七歳の少年だった王絢が『論語』を読んだ折「周二代に監む(八偷)まで来たところ、外祖父の何尚之がこれからかつて「おまえの父親 乎文哉」と言った。「周監於二代」に続くのは「郁郁乎文哉(郁郁として文なる哉)」である。王絢の父の諱「彘」(皇子劉彘の諱を避けて字の景文を用いた)と「郁」とが共通することから、何尚之はその部分を「耶耶(父親)」として読み、子供の反応を試したのである。すると王絢は即座に顔淵篇の「草尚之風必偃(草これに風を尚ふれば必ず偃す)」を引き、「草 おじいさん 風必偃」と答えた。言うまでもなく何尚之の諱の部分を「翁」に置き換えて読んでいたのであるが、ここでの「草」は「小人」の喩えであるため、「小人物のおじいさんは息子の何偃の下風に立つ」という揶揄が含まれる。何尚之の次子は何偃である。

以上の例によって、『世説』が重視する典故表現は、宋朝貴族達に脈々と受け継がれていることが明らかである。そして王絢の例のごとく「敏惠」すなわち当意即妙の受け答えのできる俊敏な賢さという評価が与えられている。

してみれば、『世説』によって、そこに登場する人物達の機知的言動を知ることとは、劉宋貴族社交界でも

てはやされた言動の実態を知るといふことに他ならない。周知の事ながら、宋は武帝劉裕が一代で築き上げた新興軍事政権であつて、その出自を辿れば軍人層である。ところが劉裕が東晋から禅譲を受けるや、劉氏一族は支配者として否応なく貴族達との交際を始めることとなつた。これまで見てきた典故を踏まえた機知的言動は、その前提として学問的素養が不可欠であるため、全く教養のない人間にとつて『世説』は無用である。ところが、ある程度の教養がある人物にとつては、その学識を活用するためのヒントに満ちた、またとない教養書となりうるのである。筆者は、かかる性格の書物を渴望する第一の人物として文帝劉義隆（在位四〇四—四一三）を挙げたい。次章では、『世説』撰者が文帝を『世説』の読者として想定したことへの当否について検討する。

四 『世説』の受容層

劉氏一族の中でも、貴族との交際を余儀なくされる人物の最たる者は、文帝劉義隆であろう。彼は「経史に博渉し、隸書を善くす」（『宋書』文帝紀）とされ、学問的素養という条件をも満たしている。もし彼が宋朝貴族と同等の機知的言動を行う必要があつたとすれば、撰者は、『世説』が文帝に歓迎されるであろうことを、容易に予測できたと違いない。ところで、東晋以来の貴族達が競つて機知的言動でもつて応酬した背景には、そうした言動によつて「才知溢れる教養人」という名声を得ることこそエリートコースへ進む捷径であつたことが挙げられる。しかし、そもそも貴族達の上に立つ皇帝自らが機知的言動をすることはあつたのであろうか。また、あつたとすれば、そのことによつてどのような意味があつたのであろうか。このことを探るために、東晋の皇帝達の言動を見てみよう。

東晋の簡文帝司馬昱（在位三三二—三三六）は、廢帝司馬奕を廢した桓温によつて立てられた皇帝で、政治的には無能であつたが、その機知的言動に対しては高い評価が与えられている。

簡文在暗室中坐、召宣武（桓温）。宣武至問、「上何在」。簡文曰「某在斯」。時人以爲能。

（言語 60）

暗い部屋の中に坐つて桓温を召した簡文帝は、所在を問う桓温に対して「某は斯こゝに在り」と答えた。これは『論語』衛靈公篇に見える盲目の樂師冕の糸を下敷きとした会話で、「暗室」の中でよく見えない桓温と『論語』の盲

目の染師冕とをにかけているのである。このやり取りを時の論者は「能」と評している。この故事が言語篇に収められていることから考えて、この「能」とは「巧みな言い方」という肯定的評価と考えられる。

この簡文帝が崩じると十歳の孝武帝司馬曜（在位_三元_六）が即位した。彼には次のような故事がある。

晉孝武帝年十二、時冬天、晝日不著複衣、但著單練衫五六重。夜則累茵褥。謝公（安）諫曰「聖體宜令有常。陛下晝過冷、夜過熱、恐非攝養之術」。帝曰「晝動夜靜」。謝公出歎曰「上理不減先帝」。（夙慧6）

孝武帝十二歳の冬、彼は昼には練り絹の単衣を重ね着し、夜には布団を重ねていた。謝安が「健康法に背く」と諫言すると、孝武帝は「老子」四十五章「躁勝寒、靜勝熱（躁なれば寒に勝へ、静なれば熱に勝ふ）」とあるのを典拠にして、「昼は活動し、夜は静止しているからだ」と答える。劉孝標が言うように、夜は体を動かさないうから寒く、布団を重ねなければならぬという意である。謝安は典拠を踏まえた孝武帝の解答に対して「陛下の理は先帝（簡文帝）に劣らない」と感嘆している。⁽¹⁾

以上の例から、貴族ばかりでなくその上に立つ皇帝にも機知的言動が見られ、またそのような言動は時の人々、就中、謝安の如き一流名門貴族からも賞讃を得られるものであることが判る。そして前章で見えてきたように、機知を好む風潮は宋朝の貴族達にもあつたのである。これを文帝の側から見れば、どのように洗練された言語感覚を磨き抜いて宮廷に乗り込んできた教養人達の上に君臨し、また自らの軍人層出身という家柄の卑しさを軽蔑されずに威敵を保つためには、やはり貴族と同等の高い教養を身につけ、且つその教養をもって彼らと堂々と渡り合う必要があつたと考えられる。次の、封禪を巡る文帝と袁淑の遣り取りは、正にこの間の事情を物語る。

其秋、大學北伐、淑侍坐從容曰「今當鳴鑿中岳、席卷趙魏、檢玉岱宗、今其時也。臣逢千載之會、願上封禪書一篇」。太祖笑曰「盛德之事、我何足以當之」。（宋書）袁淑伝

元嘉二十七年（四零）秋、大規模な北魏征伐の軍を動かした時のことである。袁淑は、今こそ「中岳（嵩山）」に行幸し、一挙に趙・魏を攻め取り、泰山で封禪の儀式を執り行うべきであると進言した。この言葉の中では、「鳴鑿」が班固「西都賦」（「文選」卷一）の勇壮な狩猟から天子が還幸する場面「大路鳴鑿、容與徘徊（大路、鑿を鳴らし、容ととして徘徊す）」を出典として文帝の北伐に喩え、また「岱宗」は「書経」舜典「歳二月、東巡守、至于

岱宗、柴（歳二月、東して巡守し、岱宗に至り、柴す）を出典とする泰山の美称である。舜典のこの部分は天を祀ったという記事であるから、封禪を勧める言葉に相応しい。対する文帝の返事は司馬相如「封禪文」（文選 卷四十八）（聖王）勅功中嶽、以章至尊、舒盛徳、發號榮、受厚福、以浸黎元（功を中岳に勅し、以て至尊を章かにし、盛徳を舒へ、号栄を發し、厚福を受け、以て黎元を浸す）を典拠にしている。「封禪文」のこの部分は、天子に封禪を勧める大司馬の言葉であり、今同じように封禪を勧める袁淑をこれに喩えて、「おまえが勧める封禪を行つて、いにしへの聖王のように盛徳を敷き延べることが、わしにはとてもできない」と笑つて答えるのである。

「盛徳」は前章の劉裕の発言にも見られ、慣用句的に用いられた語のようであるが、封禪を巡る会話内容から見て、文帝は「封禪文」を意識していたと考えられる。ここから窺えるのは、典故をちりばめ、挑戦的とも受け取れる袁淑の発言に対して、同様に典故表現で返そうとする文帝の競争意識である。文化的にも貴族の上に立たねばならない最高権力者として、文帝は典故を踏まえた機知の受け答えをしなければならなかったのである。加えて、文帝は家柄の卑しさというどうにもならない不利な条件を抱えており、かつての貴族名士達の機知的言動を収集した教養書としての『世説』八巻¹⁷は、彼にとつてその重圧を少しでも軽くすることができる簡便で手頃な書物であつたと考えられる。

五 文帝の貴族化政策

ところで、臣下貴族と同等の学問・教養を身につけ文化的優位に立とうとした文帝の競争意識は、これと酷似したものが後漢末曹操政権に見られる。曹氏と劉氏の共通点を探り、『世説』編纂の背景をより明らかにしたい。

強大な軍事力によつて天下人にのしあがった曹操は、自ら勉学に精励すると同時に、宦官の養子という卑しい出自を上流階級に軽蔑されることなくこれを支配しうる後継者を育てようと、数多の知識人を招致して後嗣たる曹丕や曹植に高度な貴族的教養を身につけさせた。こつした政治的背景の下、かの絢爛華麗な建安文学が二皇子を中心として花開いたのである。¹⁸ 劉裕もまた軍人という低層から出て、一代で王朝を創建した「成り上がりもの」である。

劉宋皇室が貴族化を企図したことは、例えば一流門閥貴族との婚姻政策^⑩によってもすでに明らかであるが、ここでは貴族の貴族たる所以である学問^⑪について、文帝の諸皇子とその他の皇族の実態を比較する。文帝の皇子達が学問を愛好したことは、次のような史書の記述から窺える。「皇太子劉劭」史伝を読むを好み、尤も弓馬を愛す」(宋書二凶伝)、「始興王」瀆 少くして文籍を好み、姿質は端妍たり」(同上)、「孝武帝劉駿」讀書すれば七行俱に下り、才藻甚だ美なり」(南史 孝武帝紀)、「明帝劉彧」讀書を好み、文義を愛す」(宋書 明帝紀)、「建平王劉宏」少くして閑素、篤く文籍を好む」(同 建平王宏伝)。就中、劉劭は次代の皇帝となるべき皇太子であり、元嘉六年(四二五)の東宮府設立以来、太子官属には謝弘微・謝莊父子、王球・王曇首・王僧達ら名流貴族が任官している。また彼は「親しく宮事を覽、賓客を延接す」(宋書二凶伝)とされ、日常的に貴族との交流を果たさなければならぬ点で文帝と立場を同じくするものであり、「世説」の第一読者層に想定されていた可能性がある。

一方で、軍人出身の劉氏一族の中には、当然のことながら、学問的素養の全くない者がいた。例えば、病気がちの文帝を補佐して、専ら「吏職」に卓越した才能を發揮した彭城王劉義康は、その伝に「素より術学無し」とされ、元嘉十七年(四四〇)の廢黜事件の際、文帝から派遣された僧侶慧林に「恨むらくは、公 数百卷の書を読まず」と言われている。また劉義宣は、「漢高百敗、終成大業」と言つべきところを「項羽千敗」と言い違えて失笑を買つた(宋書 劉義宣伝)。さらに營道県侯劉義纂は常々「始興王瀆兄弟」に愚弄されており、

瀆嘗謂義纂曰、「陸士衡詩云 營道無烈心。其何意苦阿父如此」。義纂曰、「下官初不識、何忽見苦」。

(宋書 劉義纂伝)

と、陸機「赴洛」二首の其一詩(文選 卷二十六)に見える「營道」の語を營道県侯にかけて「どういつつもりで叔父上(義纂は文帝の従弟)をいたぶるのでしようね」と揶揄する劉瀆に対し、それが「礼記 儒行篇 儒有合志同方、營道同術(儒に志を合し方を同じくし、道を嘗み術を同じくする有り)」を出典とすることに気づかない義纂は、「私めには、どうしていたぶられるのか、少しもわかりません」と答えた。これら三皇族の逸話が事実か否かはともかく、軍人層出身の劉氏一族は無学無教養の成り上がり者と捉えられていたと考えられる。

このように無学な皇族と学問を愛好する皇子達とが、対照的に截然と分けられることは、皇子達が個別且つ自主

的に学問に精励したというよりも、背後に文帝という強力な推進力の存在があったと考えるのが妥当である。ただし、その学問の実態は、重責を担う「師傳」「友」「文学」のポストを「言は礼義に及ばず、識は今古に達せず」(『資治通鑑』卷二二〇宋紀二所引裴子野「宋略」)という軽薄無能な側近の手に委ねたものであり、したがって恐らく地道な研鑽による人格の陶冶あるいは名君の育成を目的とした帝王学ではなくして、小才をひけらかし相手をやりこめること、つまり自己の才識の誇示を事とする「学問」であつたように思われる。叔父劉義綦に対して長上への敬意など微塵もない始興王劉濬の揶揄は、そうしたうわべだけの「学問」が施されたことを示す一証左である。とはいえ、貴族の教養の本質を考えてみた場合、かかる教育のあり方と、機知的言動に喝采をおくる風潮とは、才識そのものよりも、これを顕示することに重きを置くという点で軌を一にするものである。こつした「学問」によつて貴族化してゆく諸皇子達にとつてみれば、六朝貴族社会が漸く形成されつつある後漢末以来の貴族名士達の機知的言動を知ることが極めて有益である。筆者は、『世説』編纂の目的がまさにこの点にあつたと考えるものである。

これを総ずるに、曹氏と劉氏には次のような共通点があると言える。すなわち、曹操の父曹嵩は宦官曹騰の養子であり、劉裕は軍人であつて、共に貴族知識人階級から軽蔑される下層階級出身であつたこと。また曹・劉両政権ともに武功の積み重ねによつて権力を掌握した軍事政権であり、自分達を軽蔑する貴族知識人階級を配下として国家経営に乗り出さねばならなかつたこと。さらに、そうした目的のために皇帝や皇子が自ら貴族的教養を身につけるといふ方法を取つたことである。社会の上層を占め文化・政治に隠然たる勢力であつた六朝貴族に対して新興勢力が衝突する時、かつての建安文壇の興隆がそつであつた如く、その競争意識によつて洗練された文学が結実する。『世説』の編纂もまた文化面で劉宋貴族を凌駕しようとする現実的功利的意欲を原動力とするものであつた。

以上、『世説』が重視する所の典故を踏まえた機知が、宋朝貴族の言動の中にも見られることを明らかにし、その結果、この書が文帝の貴族化及び貴族支配の一助となるべく編纂されたものであることを見てきた。編年や実質的撰者の検討は、稿を改めて論じたい。

注

- (1) 『四部叢刊』所収袁本『世説新語』を底本とし、唐鈔本、尊經閣本を適宜参照した。また訳注等参考書に楊勇『世説新語校箋』(一九七一年、宏業書局)のち二〇〇〇年、正文書局)、余嘉錫『世説新語箋疏』(一九八七年、中華書局)のち一九九三年、上海古籍出版社)、目加田誠『世説新語』(上:一九七五年、中:一九七六年、明治書院)を参照。なお、引用文篇目下の番号は各条の配列順序を示す。『世説新語』の原名が『世説』であることは楊勇『世説新語』書名巻帙板本考(『東方文化』八二、一九七〇年、香港中文大學)のち『世説新語校箋論文集』二〇〇三年、正文書局)、松岡栄志『世説新語』の原名について(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』一九八六年、汲古書院)二六七—三〇〇頁)に論じられている。
- (2) 然『世説』文字、間或與裴郭二家書所記相同、殆亦猶『幽明錄』・『宣驗記』然、乃纂輯舊文、非由自造。『宋書』言義慶才詞不多、而招聚文學之士、遠近必至、則諸書或成於衆手、未可知也。
- (3) 体制批判説には川勝義雄『世説新語』の編纂をめぐって(『東方學報』四十一、一九七〇年)のち『六朝貴族制社会の研究』一九八二年、岩波書店)三七—四七頁)、文學愛好説には范子燁『世説新語』研究(一九九八年、黒竜江教育出版社)第二章二節二項「劉義慶主編『世説新語』之原因」(六六—六八頁)がある。
- (4) 『宋書』及び『南史』劉義慶伝に基づき、彼の閏歴をまとめる以下の如くである。
- 元嘉元年(四四) 二十二歳 散騎常侍(三品)・秘書監(三品)から、度支尚書(三品)にうつり、更に丹陽尹(二品)にうつる。次いで輔国將軍を加えられる。散騎常侍は継続。
- 六年(四九) 二十七歳 尚書左僕射(三品)を加えられる。
- 九年(四三) 三十歳 使持節都督(二品)・平西將軍・荊州刺史。
- 十六年(四九) 三十七歳 散騎常侍・衛將軍(二品)・江州刺史。使持節都督は継続。
- 十七年(四〇) 三十八歳 衛將軍・南兗州刺史。使持節都督は継続。次いで開府儀同三司を加えられる。
- 二十一年(四四) 四十二歳 正月、建康に卒す。
- 右の官歴からすれば、劉義慶が特に不遇であったと考えられる要素はない。とりわけ、元嘉九年の荊州刺史就任は

- 義慶が「宗室の令美」をもって特に任命を受けたものである（『宋書』劉義慶伝）。
- (5) 元興二年（四三二）、桓玄は帝位を篡奪して楚帝を称した。同三年（四〇四）、劉裕は桓玄を討ち、後の晋宋禅譲の礎となる大功を挙げた。謝靈運は、元嘉十年（四三二）に反逆の意志があるとして捕らえられ、広州で棄市の刑に処されたのみならず、拘束時の「詩」には「韓亡子房竇、秦帝魯連恥。本自江海人、忠義感君子」とあり、宋朝を「秦」に、自分を「子房」「魯連」に見立てて、晋朝に対する忠誠を表明している（『宋書』謝靈運伝）。
- (6) 出典調査に当たっては、岡村繁「世説所見話言用典考」（『広島大学文学部紀要』五、一九五四年）を参照。
- (7) 漁父謂孔子曰、人有畏影惡跡而去之走者。擧足逾數、而跡逾多、走逾疾、而影不離。自以尚遲、疾走不休、絶力而死（漁父 孔子に謂ひて曰く、人に影を畏れ跡を悪みてこれを去らんと走る者有り。足を擧ぐることに逾いよ數しにして、跡 逾いよ多く、走ること逾いよ疾くして、影 離れず。自ら以へらく尚ほ遅しと。疾走して休まず、力を絶くして死す）。
- (8) 井波律子『中国人の機知 《世説新語》を中心として』（一九八三年、中央公論社）では、『世説』に見られる機知的言動を七項に分類しており、典故表現はその内の一つに数えられている（三七八―三九頁）。
- (9) 岡村繁「六朝貴族文人の臆病と虚栄」（『日本中国学会創立五十年記念論文集』一九九八年、汲古書院、二九三―三五頁）に、当意即妙の言辞で人々を驚かせることが、任官の有効な手段であったことが論じられている。
- (10) 典故を踏まえた発言場面の分析結果は末頁の「附表」を参照されたい。
- (11) 謝安の登場回数は一一五回である。なお、彼が『世説』の中で最高評価の人物として扱われていることは、すでに矢淵孝良「世説の撰者について」（川勝義雄・礪波護編『中国貴族制社会の研究』一九八七年、京都大学人文科学研究所、四七―四三頁）に指摘されている。
- (12) 井波前掲書、及び森野繁夫「『世説新語』における評語 「朗」について」（『広島大学文学部紀要』三十七、一九七七年）を参照。
- (13) 師冕見。及階。子曰、階也。及席。子曰、席也。皆坐。子告之曰、某在斯、某在斯（師冕見ゆ。階に及ぶ。子曰く、階なりと。席に及ぶ。子曰く、席なりと。皆坐す。子これに告げて曰く、某は斯に在り、某は斯に在りと）。

- (14) ここでは唐鈔本『世説新書』（小西本）に「此言夜靜則寒、宜重茵（此れ夜は静なれば寒く、宜しく茵を重ぬべしと言ふ）」に作るのに従つて解釈した。「茵」字、底本作「肅」。
- (15) 謝安の言葉には、孝武帝だけでなく、簡文帝の機知に対する賞讃が前提としてある。一方で、謝安は桓温に操られた簡文帝の政治面の無能無策を、母呂后の傀儡となった「惠帝之流」（『晋書』簡文帝紀）と酷評しており、機知頓才に対する評価は政治的手腕と区別してなされると考えられる。
- (16) 原来の無注本『世説』が八巻、後の劉孝標の有注本に至つて十巻本となったことは、楊勇前掲論文、八木沢元『世説新語』（一九七〇年、明德出版社。解説の項）、渡部武『世説新語 以前の『世説』伝本をめぐる問題』（『安田学園研究紀要』十七、一九七六年）に論じられている。
- (17) 『世説』が拠つた先行書については、主として裴啓『語林』や郭澄『郭子』などが挙げられるが、阿部泰記「世説新語の取材資料について」（『山口大学文学会誌』三十四、一九八三年）では、それ以外の史伝書が用いられていたことを論じている。『世説』があれば、いちいちそれらの書物を検索する煩わしさが省かれる。
- (18) 本論文は、曹操政權と建安文壇の成立事情を論じた岡村繁「建安文壇への視角」（『中国中世文学研究』五、一九六六年）に多大な示唆を得た。
- (19) 文帝諸皇子と外舅（及び籍貫）は以下の通り。劉劭：殷淳（陳郡長平）。劉濬：褚湛之（河南陽翟）。劉駿：王偃（琅邪臨沂）。劉彧：王僧朗（琅邪臨沂）。また諸公主の降嫁について「諸尚公主者、並用世胄、不必皆有才能」（『宋書』褚叔度伝）とあり、才能以上に一流名族の家柄であることが重視された。
- (20) 宮川尚志『六朝史研究 政治社会篇』（一九五六年、日本学術振興会。第五章「魏晋及び南朝の寒門・寒人」序言）を参照（三九三頁）。その第七項に「学問・教養・徳望を有し、伝統的な家風を有する知識階級」とある。

〔附表〕

	発言の場	回数
A	宮廷	33
	他家への訪問時	26
	宴席	13
	喪礼	9
	官衙・地方軍府	7
	経書の講義	3
	戦場・軍議	3
	清談	2
	寺院	2
	賭博	2
	狩猟	1
	未詳 (人物批評)	24
	小計	125
	B	自宅
行旅		5
民家		2
読書時		1
手紙		1
小計	20	
C	未詳	33
	合計	178

A… 社会的場面での発言と考えられるもの。 B… 独語あるいは家庭内での会話 C… 未詳 (ただし人物批評はAに項目を設けた。